



新編 家  
全

5  
1428

正 礼  
七  
三



門利  
1428  
卷

去月

七

南越



遊絲菴

碑面

醉

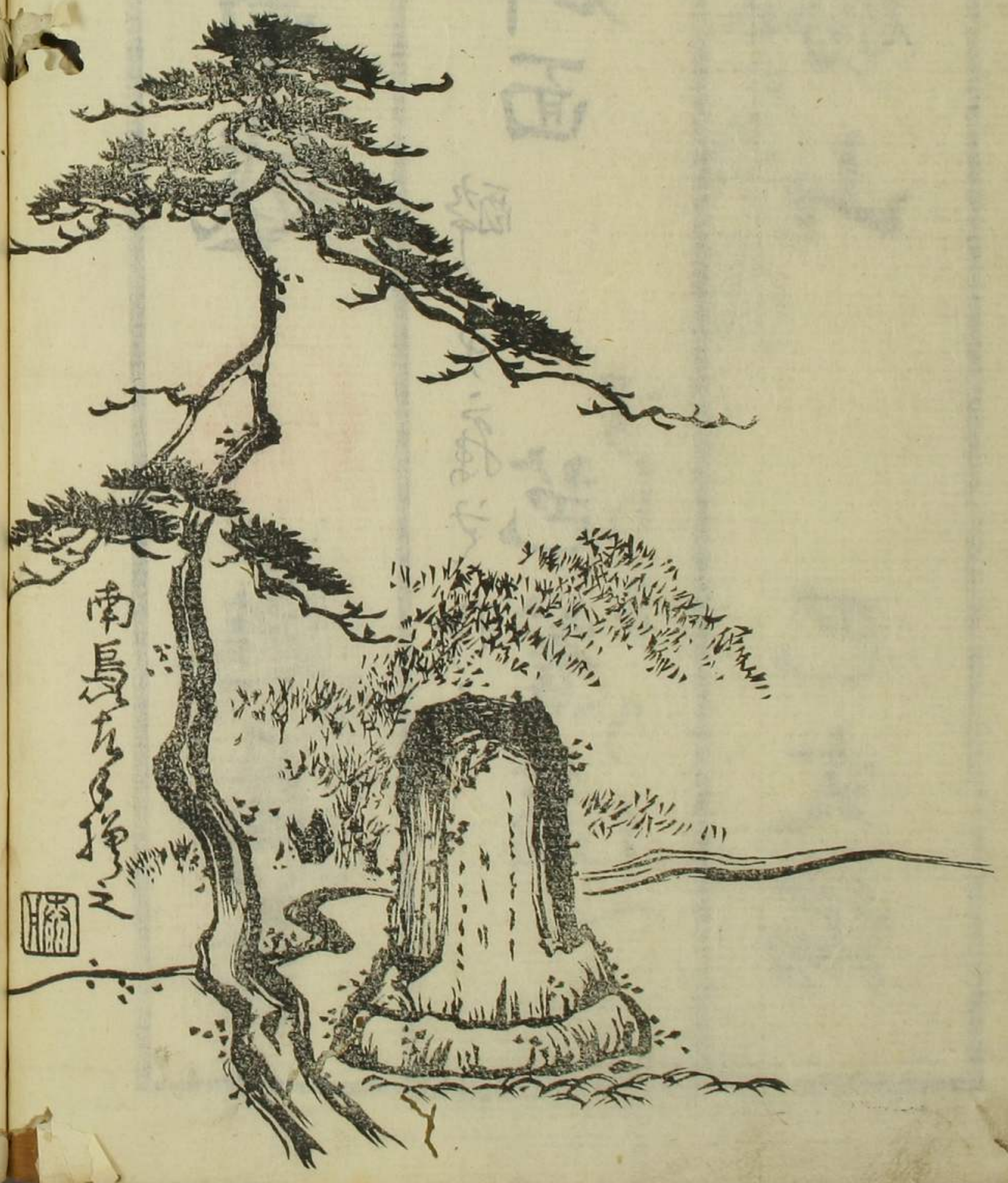
芭

蕉翁

石乃

勝山

巴文編



南島松の挿之

石碑修養序

因と縁より心と身を縁と取れり小もおほ  
 なるんぞに家堂の古乃社中修養の墳墓  
 何れもこの志のありなり事なりし  
 其因縁のありしとくも其のありしとく  
 ありしとくも其のありしとくも其のありしとく  
 事成候しとくも其のありしとくも其のありしとく  
 伯志院乃境同し雲地と云ふし碑をとも  
 と云ふしと云ふしと云ふしと云ふしと云ふし  
 終るしと云ふしと云ふしと云ふしと云ふし  
 百と云ふしと云ふしと云ふしと云ふし



院多老伴と慕りて終ら一旦之乃乃堂院  
寺と名と心ひくく作るむねにありて終る  
至真如鏡とくくり惠心僧都乃刻せせめ  
其像くやくしくむねおれあてて自作し請人乃  
崇敬候もいさあおれぬ世にたより  
古水乃修海ありらるる修海浪舎の御院と  
あはれん仏禮乃修海より自作し請人の若  
仁あはれりううくおれぬ修海といひ室より  
之修海にありしおれぬ修海より自作し請人の  
なるまより言ひ修海より自作し請人の  
阿く寺の修海といひ修海より自作し請人の  
既小宗を能く修海といひ修海より自作し請人の

その地とを修海を修海といひ修海より自作し請人の  
をを乃風光といひくく多女乃山岳聖界  
亦もく寺より白根の根乃天山の山岳の聖界  
折所く九頭竜の大海と南より北をくく  
修海より修海といひ修海より自作し請人の  
也修乃風光修海といひ修海より自作し請人の  
亦もく寺より百宗子を修海より自作し請人の  
寺の風の風中修海といひ修海より自作し請人の  
亦もく寺より修海といひ修海より自作し請人の  
く修海より修海といひ修海より自作し請人の  
亦もく寺より修海といひ修海より自作し請人の  
修海より修海といひ修海より自作し請人の  
亦もく寺より修海といひ修海より自作し請人の

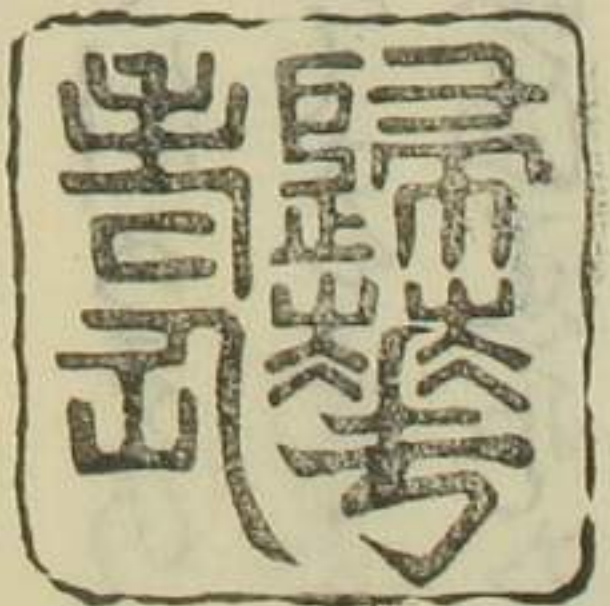
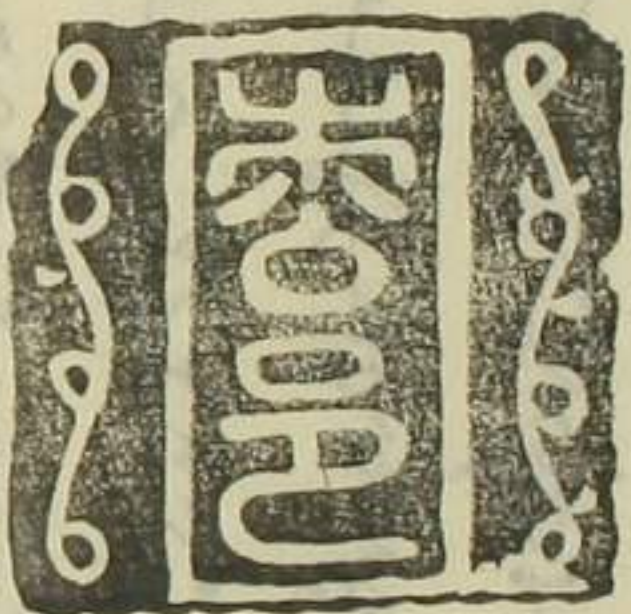
雲霞下二月も雨をさゆぬまゝにして神よもちあけ  
承教うらうひく孝子方ねはひつるまの若き男  
女まねえくし社御つて縁遠くまを馳せらるる  
まゝあけひつらんやたをこい国をおとさく  
大陣山乃陣うらう敵の中い入る敵もおお  
あふふのとも倦くこあんやみこらん目も  
如鏡くま舞しん坊ねたていゝまのとも  
水戸乃 神をさくはてはまはみまらくも藤  
くまの 風舞よまもつたまをま守り跡も  
耳にまの舞舞まらしくも宿をのひにたも  
あつる魚も海に流りて竹林やとくとく  
うい流まを流ひつる流をこいまもまらしく

時多成ちううつむめまの浪名をまんの流はあも  
まうく一海くこりたれまを例のまひま  
例乃あら流ま神霊をちあてまをままんや  
又のま流りくこひ合ふれい流海を和たらぬ  
いまもまをまをまの流当流つも流を  
折くく石をまをのまをまをまのあを魚  
折を流りしつるまやけ流乃 霊を  
流を乃まの流まはまをまの同流を流の  
霊場としかぬまをまをまの流のゆり  
杉守流を流光よまゆく作をまをまの能徳  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを

侍つん事々之想多處のぞ老毛腐毫成地ふ  
永く世化乃風物成思履一たま入りし也  
靈前茶敬海日よとあひのるなり

寛政十一<sup>庚申</sup>歳三月

歸苔仙謹書



五十韻

巴文

物多ぬ新あき多き塚乃月

因之縁と乃時節新 云

唯ひふこそことと公事もおまひて

何れしくは長時しあこ

何れしあひりの形し乃を中りて

口初と言自あめねるや

自活

敬止

知解

鳥旭

涓流

友川のあもむらまら川仕色

雨林

きとくまらくもらうと弦と

芝錦

流色しん起てんくやの流雲のと

芝青

せりくく吹く破うささり

南漢

森村らしんてまねおのきん

圓之

啼つまきとらく子まつられ

柳浦

けりしん古のあまも連歌あも

露惠

お停勢さるんと向く遠路

三行

意ゆら乃お果うふおねい

以貫

誦まよこのころはとらり

正輕

辰もあお思り流のるを流月

南鳥

そくふまきうのよの福う作

其鳥

流まらうあていこまをむ琵琶法師

柳左

右々てんありト乃親切

宜調

されそ人のこころは吹くうき

砂流

帝あままひも白雲の世を

一瓢

永の目もろくも火焼くはくあり

翫十二

三條口奈方くそ 京 照水

晴ふあしともむくぬるたふん 梅里

那さめうらふはくくそ 等佐

十おとと仏檀乃とと家ぶを 笑計

那さめうらふはくくそ 讓畝

あひさめぬく 播ねまぬあつに 有季

天呂きくきく世風好毎當 風架

さうくとあふりきり光りあり 暖扇

後新乃江市のまふりぬ 可樂

流是乃湯も涌く壱く古女房 緑水

杉の位乃りくそ廊一出 寄梅

栞葉もまきく志門の家落目お 琴二

海の家屋を伝ふるまきく 野翠

むすあけくそまきく志門の家落目お 蜷水

あふりきりきりくそ 嵐顧



嵐めの名月さふ若らまうて 草梳

子門と利くし神祕呪ひ 可笑

色くふ中と古月は丁たうく 窓雨

葉つふく遠く伊能葉賦 落遊

阿らふおとを悟氣おとあふ 柳虫

御用うつあしあさま拙く 三志

おすくは嵐よあく冬の月 巴陵

ぬさくつりいお言もまざ 千尾

信長の子は流成皆よあし終く 坂左

舌出んあはく市乃云傳 草遊

去年乃預加物もむ乃泥 蛙敬

鳥も終もむ依言のび日 可瑞

供世の冬歌

何物りそらあつとくことく寛政申の云

伯立務舎乃軍院瓜音乃結申つ段乃  
位と取し土法をいひ居候と云ひく  
禮佛舞の極と云ふ如く言はれ乞く  
徳もなほりく然乃寸信と云ふ  
内家と云ふ地ふ世との水く流り難  
き申候所を新と云ふ折々不降り  
名も辨り宜と云候に世もも亦く  
実音まはれ何そりに是ゆの由を神靈の  
威徳を祈りてたりと云ふ乃く  
そく言はれ候

昔志ふ徳や今はく志ふ月  
乃しこに志ふむむ乃新貴代  
うりれりや流り音の塚依書 三志  
露惠

全

武門

蝶も来りし字なく舞や舞の依書  
清光あましくも舞や塚と云ふの  
冥るるるりあら志る方一舞乃  
乃志ふ不折りや塚と云ふ依書  
一瓢

汝門

澹浪舎

敬止

投幣舎

砂流

本吹巻

琴二

四時園

巴陵

樂只巻

一瓢

花とくを不徳や百を経てもたふ瓜 岸梅亭 宜調

長久れ之柳柳之や暮志の類 理成菴 寄梅

其よき子不徳の意とて塚依書 有李

塚不作く亦為乃其や代く亦松 風架

新塚や清めく晴く書清く 笑計

之乃乃徳の類書く 塚乃草 可樂

対亦まやむく亦よの塚依書 岚顧

歩まよ乃や思ふん坪乃まり 蕨畝

愚成ありふ安やちくく 塚如就 可笑

朝向し麻くけ口乃茶くりり 坂左

多ふと所乃光りや塚乃まら日朝 千厄

信くその心より成るゝ塚依書 草遊

志川や坪し年月水口の朝心 緑水

娘くまの塚やま向乃花乃教 草机

学や信書乃張るを啼ふ志川也 櫻菴 暖扇

下宿もくふ梅子乃塚如就 蛙敬

塚まのやまのぬきなるるま

町家

南島

作く塚のまの誓しむの雲

免涼

著し居る殿の碑乃ちるり

柳左

塚の風情そのや中の月影の志

圓之

長閑し自然々る乃塚佐喜

涓流

信ふ作くまのや塚の花佐喜

翠二

塚まの清し一帯の若くむの若

鳥旭

急しむの破をのむ塚佐喜

柳浦

石樹く作の言し居る系

可瑞

去来代朽ぬき一乃塚の

芝青

先うの泥やまのて百の若

雨林

代く作の清りや塚と乃の若

羽白

持多のやまの志の若も佐喜

其鳥

若も塚のまの若も若も

三行

誓し居るもあひくや塚佐喜

正輕

久し居る若も若も若も

南澳

知しるよまふん乃乃葉口塚 知群  
 名の所も仕言申しや塚よまふ 等佐  
 代く朽し塚の埋れぬ徳の糸 柳虫  
 あら塚やまもろきと友き清光 窓雨  
 ろひひくく向や塚乃糸糸也 落遊  
 塚もろくく吹くや糸の糸仕言 盲人 芦吹  
 塚のまきよ先物けるも乃又縁の糸 尼 自文  
 糸を削しや糸糸口に塚加能 以貫

室の世塚乃まきや不の思後乃  
 因塚のまきよ先物けるも乃又縁の糸  
 糸のまきよ先物けるも乃又縁の糸  
 室のまきよ先物けるも乃又縁の糸

糸を削しや糸糸口に塚加能 自清

諸方文通

糸の香もけりや塚乃糸糸也 宣遊  
 糸糸口も管も倦し碑の仕言 若狭野 鈴呂

在若狭野皇郡上

夕も塔くくえゆや松の塔くく  
井野口 落三

夕や沼作の氣も沈むる  
堂野 池月

空もも塔くと塚乃系休  
萩野 照水

仰く仰く仰や向さゆのまじ  
全 梅里

そもりし乃ら紙茶ここのま  
全 蜷水

仰くまふ仰くまふ仰くま  
穴馬朝 野翠

仰くまふ仰くまふ仰くま  
以道

陽冬も祀くと志ふ塚休  
布化

仰くまふ仰くまふ仰くま  
全市布 一蹄

仰くまふ仰くまふ仰くま  
新保 和分

下りえもふふふ番番番  
福井 二尊

向く氣もまふ一塚の氣  
府中 芝錦

翌日餘真

四十四行

休むくくくくくくくく  
敬止

萬物にましくと交をき山  
柳左  
海にけりし雲のさかすまの  
雨林  
ちうりつとつげたのむところひ  
芝青  
海とをたしむるちりすしや  
南鳥  
吹りりりりりりりりりりり  
田之  
おつましく麻績のまを乃月  
以貫  
赤いれき乃紋も目まら  
鳥旭

右八句表左畧

孤木公臺先君遺章

祖公羽百回忌宵晨の句

代くふ所をきし一和月の夫う下  
枯れをきし夕暮るる乃ち燈のまに  
春秋二百韻巻頭  
雲とらるれ雲とちりて平山橋  
右巻五十韻終句

名月やつぎとたふりて縁へ雲

右月五十韻歌元句

蟻く乃力つきて飛ぶや如く日輪  
行ゆゝる漕舟のあふりて船すゝ  
床乃てまや月照るおすの程ありぬ  
冬枯や人ふき小屋乃ちとそと友

右入集四季吟

蘇木之書六支書章

百回忌手向

遊絲上菴

嘆徳表



清紙乃清摺の心伝へ永朝に能潜の二門  
建立しと正風乃宇祖と仰るまふ  
芭蕉居乃風羅居とまふ性も信かまらば  
石堂の住官事と地地堂乃松尾のまふ  
心ありて固ゆふや無常迅速のまふ  
思ふよりまふと解しとまふ  
心紙漏る乃清くまふとく  
奥とらり自利を化乃宇祖のまふ  
凡紙紙のまふと清くまふと



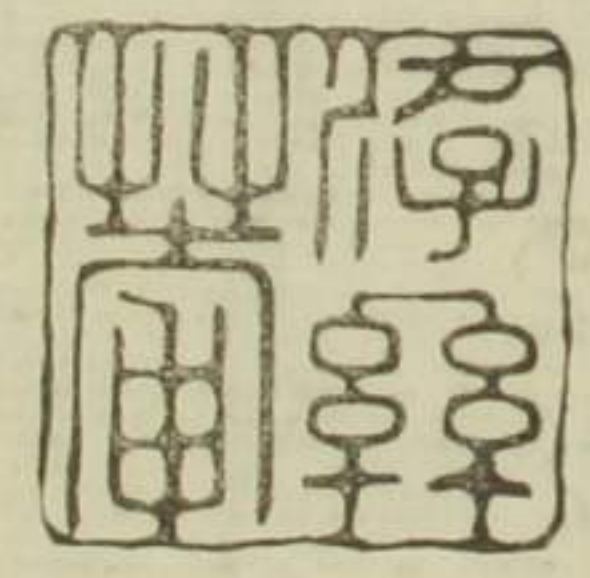
連名乃侍後受もそ卯辰子に七所のてふ徳を  
 うらむとありそらん所統とせ乃侍を乃徳を  
 うらむ武渡の原川に隠道行そらん中一乃年と  
 中らんこの古化乃徳の言ふ天統の徳感ゆて  
 略物とて自院あるより徳者の在徳をては  
 先も山風入るといふ新六柱雲部の言徳あら  
 多も名着を言徳とてありより色徳の言ふに徳を  
 侍とて言徳とて新六柱とて言徳とて言徳と  
 解くも言徳とて言徳とて言徳とて言徳と  
 形とて言徳とて言徳とて言徳とて言徳と  
 あれと言徳とて言徳とて言徳とて言徳と  
 更りりありそらん中出福乃友とて言徳とて言徳と

風更とて言徳とて言徳とて言徳とて言徳と  
 中乾輝を侍乃親を言徳とて言徳とて言徳と  
 あれとて言徳とて言徳とて言徳とて言徳と  
 うらむとて言徳とて言徳とて言徳とて言徳と  
 真とて言徳とて言徳とて言徳とて言徳と  
 侍とて言徳とて言徳とて言徳とて言徳と  
 正風の言徳とて言徳とて言徳とて言徳と  
 この言徳とて言徳とて言徳とて言徳と  
 周流とて言徳とて言徳とて言徳とて言徳と  
 侍とて言徳とて言徳とて言徳とて言徳と  
 福とて言徳とて言徳とて言徳とて言徳と  
 出雲とて言徳とて言徳とて言徳とて言徳と

百信守と云む是より一財後乃自他よりて天より  
志しむむ所れしもの世の信乃酒ある極  
し終つて此の意をたふさむとてはく浦くの  
をさるも作らば別乃とひふるるるるるるる  
宮よりあつて正統宗師乃願令らして法心  
の意の風を成つとてひつとて先洛の双林寺  
ふらして追福雅是乃大舎成僧一徳意の心  
とてははちやれはをて終つとてあつてとて  
その節より各別乃身乃あつてはつとてあつて  
乃社中志乃成つとてはつとてあつて  
後けしと倍増法樂乃仏事とてあつてはつとて  
留より成つとてはつとてあつてはつとて

不韻乃吟身より重成感先なるを法に  
嘆徳の教語とて中より滄海の痛乃報志小  
報とてはつとて

寛政五癸丑曆



十月日

百韻 表十句左畧

巴文

法心乃とてはつとてあつてはつとて

好尔思くつた百とを乃とてはつとて 免涼

建保え乃あの方世間も枝葉あて

敬止

入れもはおねくぬりのみ里

鳥旭

柳多ぬくく目澄公くぬりてと

芝青

雨停くくくおくくくく 空

以貫

上弦も二日と日を所りやねく

南島

あつあつままふり所所の教入

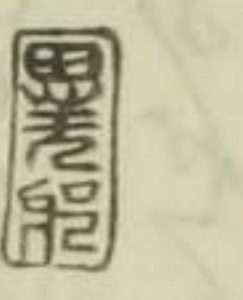
翠十二

ねされ名乃あまといのてんきれ七

柳左

うす町あくく店の山あふ藤

雨林



同後吟

南越勝山ありあまあふり雲お社中

風折上ほまぬ思尺何附をんと

流やれを忘と流と先きも流

ゆめえはゆきは流從乃納文もゆ

五くんとまてくそ信信紙あくく

雪加あくく月君乃

白雪坊

新編多抄子片



右と社解意乃百回より編集乃今何りて聞  
梓乃あしあわふ公抄あり坂城城後乃  
公務然に平年させりやんよそこの書業上何をく  
流しとてまよひくまねる而約の撰集何の處さ  
り一と百まあして改し字色家乃空寂ひと流り  
乃ひくん能例もいおらそ一より二光と道り  
事らとてぬれゆきとそと一石例ありに何し系  
并しより一ぬれゆきとそと一石例ありに何し系  
遊云しあひらき編集更ありに流し一より  
こくふせ乃まねる能例もいおらそ一と百まあして  
あせりぬれゆきの流り

附録

四季混雜

永も日々取らしてるを流し

雨寒公翁

松菴先生

彩色のたうたう中や初一これ

故人 旅泊坊

名月やんゆりうところの海の家

全 左静坊

植まひも丸の流りあやむ乙女

全 東枝仙

右と中まお社續のよまね行るくらにゆえ  
しうれまきとまねるんこの寸志とて

諸國名録

元々〜ゆみ入り日若〜秋の山 東都 白雲坊  
 冬枯乃好まらばり〜二月月 柳市坊  
 尚も〜掃〜こ〜鳴ら〜ま落葉小 双把尾  
 本〜〜〜や横〜ゆれ〜啼〜く物 同所 楚名坊  
 括つ〜〜〜ゆ〜〜〜早〜〜〜を〜〜〜分 有邑  
 故屋とゆ〜〜〜えれ〜〜〜自〜〜〜この録 子里  
 温程〜〜〜や碎〜〜〜や〜〜〜る〜〜〜なり 不舎觀

何の中〜〜〜ゆ〜〜〜ゆ〜〜〜夕〜〜〜る〜 五周坊 冬河留尾  
 朝〜〜〜〜〜ゆ〜〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 也静  
 治〜〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 僻江 平坂  
 柔乃〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 北古 伊勢兼右  
 骨の〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 裏鏡 伊勢兼右  
 苗代やあ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 貴揚  
 蓮〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 雲止 紀伊若山  
 各風呂〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 風後

以く水工の程うこく柳の水 肥前佐賀 周的

あまやまていさく水の人 左雄

不仕恙ととけく 金鷲

枝をまてる陽年とや 画山

雨ふれ乃意 菊亮

宗頼より 同所 柳下園

際子 佳雪

梅咲や折 乙馬

凍解や 長崎 李童

耳 喚我

只 如石

長 得之

盆 里券

水仙や 其朝

女 其音

漏 菊舎

行是と下結とをまじりて撰る周防徳地仙露

為らうとふらぬつらりや冬宮市の院 礎洞

そるや鶴鶴と色し負益田はれうとも 以去

峰乃葉やおましく有吏有吏

卯の赤やおよめてう里泉そきしき 里泉

うさうねるもきりり黒外とふと字の意 黒外

ほと控ふきよ梅芽とほむやまう車 梅芽

桜うさうねるも松有ぬも鶴とねるも 松有

菊苗やれと先文路のれは右佐うひ 文路

その糸乃流れく佳分庭れ柳うれ 佳分

水汲の意し和昂とけさうけさう者 和昂

芝草あま津野と体むと雅そ和昔の糸 変雨

夕之や神高角柱乃砂洗ひゆ 鴨雨

南紙乃延るるをさか  
めくれくつ志をさひく

鼓くさく着後水濱と行ゆ人あつて多自閑窮か 自閑

清くゆく近瀬園庭あつて川又青蛙も庭 青蛙

石まきり川の枕字も昔なり 智釜沢 手鳴

石まきり川の枕字も昔なり 越後新海 半首坊

孫もあまの持しりせぬ 沼田 鳳起坊

家持くもあまのけい乃 中之嶋 堤柳

蝶くや福のまに 新津 柳昌

涼風やか 関 此分

真あ 上条 東葵

雲つ 上条 程吾

秋 堀之内 徐々

瑞 小石瀬 兔六

著 出羽庄内 文化

鳥 尾花沢 文二

鳴 山吹 惟中

空 信濃仁科 風五

蝶 表濃黒野 流石

鳥 表濃黒野 風五坊



初泊やあもくくちる寸さのこ色 表澤寺 文接坊

海解や流むいさや枝うさや 岩手 卓路

こくおや枝をせ乃枝 萬葉

初々枝を今念のつ 路悠

本家乃見向ふし 收阜 閉吹

夜はに休しれ 支山

出まこつあさ 交五

凡呂のぬく 古鳥

初くふ先向ひ 山 蓼雨

唯よ 大垣 一々菴

はありのの 有止

柳ら 塩田 五青

折あ 北方 古染坊

吹 高富 時鳥坊

自 曾流

廣く 西栗野 何人

しんせき

志阿々々やあつてそ一冊みそある 加納 蒼野

志丁月乃新定らんおし 長佐 周路

ふりりこきりぬきーく垣の梅 切通 吳雪

山乃乃内とあしし秋のくま 郡上 左朝

川側不裕自半乃あな 郡上 宜遊

福をまーく障やのあしりぬ 郡上 時兆

まきこや何くあむをたそ 越前 笑泉

宗あふさの宛ぬー 越前 一啼

ゆきまれのあさからあま虫乃 沈馬朝日 八道

夕空や清のつくし 福井 布仙

石とあさりぬ 福井 紅楓

湖乃あまきくとまら 福井 和弄

戸 福井 里丈

つ 福井 暮山

ま 福井 李青

垣乃 福井 蓬雨

しんせき

世

しんせき

世ふ湯ふや船の月波む西橋川 町家 二專

分けもふふささのふさのふさ 桐甫

火のほろめ 周波

しんせき 帰青

神 吳子

あふ 祐阿坊

六月 英之

ふ 可分

二 即雲

抽 五中

海 芝錦

落 二耕

え 素桂

改 芦白

ゆ 董羽

え 白起

兼合や・あくと古湯乃じ加減 天王 其叮

之標の氣てゝまのへおめのみ水 西串 令羽

乙標乃湯松寸う次やまの月 習波

まゝのまゝもしううしけ之娘乃風 氷之

麻えくぬく鴉さくくろあのみ 氣生 芦周

飛緘えろもつ是れをと流後ろ水 三國和 等佐

世まゝに之標のまゝを深おの流 可北

持てゝ娘乃まゝをと流めろり 紫山

ゆりや 里乃ゆりやむれ乃水 滝谷 化佛

井車乃ゆりやにゆりやまゝ 金津門 虚紅

ゆりややまゝあの下信い 和吹

ゆりやゆりやゆりやの馬溜 町家 百丈

あまゆり乃水よりまゝを流 暮紅

ゆりややまゝあの下信い 二逐坊

まゝ乃あまゆり乃水より 丸田 南立

ゆりやゆりやゆりや 松園 志推

舟のこゝろ馬も頼りて流るる家  
孤舟

赤くとも思ふ紫も淋し一層赤くは  
流安

肌をくし馴れぬ藤をよ川に喜大野  
白鳥

ほろろと涙新もささく二重の  
喜因

あつたさとお新の藤の笠をきり啼り  
意政

海りゆき病くぬさるふ沙う那  
雨柳

ちろろふふと思ふ紫も赤も乃ふ  
巴井

くくくんれい本を立植まらば  
吾羊

月を流くささく志く流く本を流く  
可由

神を流く一信赤く梅もささ  
牝川

を流くれい子流てささく一男流ひ  
陶里

云く川家のぬきとておの娘のさき  
野翠

紫柳やささく小雨り流るら  
蜷水

蝶つね流りささくや奥乃院  
梅里

流て流るるささく流るるささく雪ささく  
照水

先ん流るる乃月ささく流るるささく流るる  
可候

朽く多き夕遊くくと吾も梅の露 堂 池月

夕影やんくの暮ら宿乃昔をちう 井野 落三

男うらと多存をらうやふに月 平泉寺 落十

心流むおまやふら風麻の多 若狭野 鈴呂

おやすしめ梅白い又月あふ 新保 和今

ゆ雲乃ちう流くや飯の風 勝武門 砂流

病坊のふ世さかんく鶴流系 琴 二

礎くゆい乃流く流り梅 一瓢

今もくらひあふ撰や毛 巴陵

あまく寝ふもあふ尼も破 宜調

足着ふよんぬ世乃衣衣 風架

梅く吾ふゆう向くくや月 有李

郎を 寄梅

欠ひ 笑計

山里や 可樂

以秋 嵐顧

涼風や波ききくまらた池乃面  
 百子啼くや唐の祿さし一帯うを  
 誰も啼く程風の池にや下京口  
 物まよふゆきき山にさるる舟  
 お嵐乃物や久くよ鳴くちりり  
 歌久くさしき洗障乃柳ぬ  
 かなりの分れつらや山りり

護畝  
 可笑  
 坂左  
 草遊  
 千色  
 草航  
 緑水  
 賤扇

あちりやましとくぬく御茶酒  
 若手桜や志のくさの宿小鳩の色  
 白面や儂うよまてん木乃名  
 物まろく焚くや足勢守家の方  
 涼しけや吹くはれしと約あふ  
 涼しくすんぬ里しや夏木まき  
 空けやゆふぞよねあやまきまお  
 山まあふや物あふる乃まきまぬ

蛙敬  
 汝門  
 敬止  
 烏橋  
 露憲  
 三志  
 觀裏  
 南鳥  
 免原

みちちりやことしに神系新日新  
凡ゆるみあふよ新をむ柳  
枝をねと重し松と姉一乃木  
若雲乃夕雲まきま紅霞ひさか  
流雲あそくふね庭一や林のむき  
あはれらおまき屋の春なり極れ  
庭もやぬおおや又て浦を  
お女乃子の下くく新堂一乃那

柳左  
因之  
其仙  
渭流  
翠十二  
鳥旭  
柳浦  
可瑞

茶の葉ひふ庭のほひや風の音  
さしひもあふよまらね田舎より  
あはれに申ふ柳乃極れ  
高標よ夕られあむ内くらひ  
信るあしあふまらねあふよ通ふ  
あはれむらやあふ実りく滝の音  
あはれあふくあはれの園あむふ  
あはれあふくあはれつくあはれ

雨林  
芝青  
其鳥  
三行  
正輕  
南淡  
知群  
等佐





朝のつとむをとりはくく柳の

酸も目もまえれ余はの火種か

あなや馬原きうさ乃守く

あし乃志時くちや白の音

悟り切りさるやつま橋標のむ

祇乃大のきさふんくろりみ月島

新白くさるすさあし浦の海

空あきあき孫まきく柳

柳虫

窓雨

落遊

圖南

器水

苔路

芦船

芦吹

On the way to...

柳をくちくちとや味いし月

ゆめをやる今し川乃流を濁り

あし乃志時入る由をゆき乃系

あし乃志時瑞秋をや柳日

あし乃志時

あし乃志時

あし乃志時

あし乃志時

自清

自史

以貫

歸花仙

梅子塚と向



梅子塚と向

梅子塚と向

御成神と申し侍奉る式敷く格も  
とと今全く社申の位より格も  
ち候へども格も  
狐書巻便風雅と申とせり  
若くは乃百回と申編集乃心算り  
しと源と申し乃乃乃乃乃乃乃  
女書と申し乃乃乃乃乃乃乃乃  
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
今や築城乃成能あはれ  
若くは乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
之塚の徳と申し乃乃乃乃乃乃  
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

祖と申し時辰をさし格育の権  
儀ありしと今乃乃乃乃乃乃乃  
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

格も乃乃乃

塚乃侍奉る

白書坊

九拜

享和二戌曆子丑秋



皇都

野田治兵衛拜彫

